

## 2019 年度 立命館附属校新任教諭 A P U 研修

附属校教育研究・研修センター

6月7日(金)、2019年度立命館附属校新任教諭研修を、立命館アジア太平洋大学(APU)で開催した。APU事務局に準備いただいたスケジュールに従って、学生の皆さんの協力も得て充実した研修会となった。新規採用時に参加できなかった先生方の参加もあり、総勢25名でAPUを訪問させていただいた。APUについて理解を深める研修、模擬授業、キャンパスツアー、附属校出身学生との交流、APU学生へのインタビューなど盛りだくさんの内容となった。

### 《研修内容》

#### ① レクチャー「APUについての概略」

講師：APU アドミッションズ・オフィス（国内）課長：村上 吉胤氏

APU アドミッションズ・オフィス村上吉課長のご挨拶の後、学生が作成した APU の紹介動画を視聴した。大学内の取り組みや活動に加え、別府市内の風景や自然豊かな風景が盛り込まれており、まさに「天空の大学」を連想させる映像であった。

その後、村上課長より APU の概略についてお話頂いた。内容は以下にまとめる。

##### 1. 学生の生活について

1 回生は AP ハウスで共同生活をし、その後学外で生活する学生が多い。多くの学生が別府市内で生活しており、国際学生とシェアハウスを行う学生もいる。

##### 2. 国際大学としての APU

6000 人の学生の内、半数が留学生であり、そのほとんどが短期留学ではなく学部生として APU で学ぶ学生となっている。また、学生の出身国も多岐にわたり 90 か国にも及ぶ。その内訳についてはほとんどがアジア圏の学生である。

教員においても半数が外国籍の教員であり、授業についても、日本語・英語の 2 言語で開講されている授業が 90%である。

##### 3. 近年の入学者の特徴

外国籍の学生については上記の通りアジア圏からの入学者が多い。一方で、国内からの入学者に関しては、近年、関東圏からの入学者が増加している。関東圏からの入学者の増加については、国内企業においても海外の企業や個人との関わりの重要性が高まっている情勢が影響しているのではないかと考えられている。

##### 4. APU で学ぶ強み

様々な学生と関われることによって、社会に出てからの人とのつながりがよりグローバルになる。授業以外でも、外国籍の学生と私生活での関わり等で、多様な文化やつながりを学び築くことができる。また、国際学生の英語力が非常に高いため、国内からの入学者の意識も高まり相乗効果がある。

世界大学ランキングにも上位にランクインしており、世界基準の授業・学びが得られる大学である。

留学プログラムについても目的に合わせて選択できるよう用意されている。学生は自分の語学のレベルや目的に応じて挑戦できる仕組みとなっている。留学プログラムの中には、語学力の向上を目的にしたものだけでなく、問題解決型の学習を経験できるプログラムも存在する。

(記録 立命館宇治中高 徳地 克己)

## ② 模擬授業

講師：APU入学部長 近藤 祐一先生

今回のAPU研修では、近藤祐一先生に講義を行っていただいた。

テーマは、異文化間コミュニケーションであり、学生の約半分が国外からの学生を占めている大学ならではの講義であった。

内容は、5～6人で1グループとなり、そのグループ内で意見を一つにまとめるというものであった。グループの中には、性別・所属学校が異なるのはもちろん、国籍が異なる先生もおおり、まさに異文化間コミュニケーションというグループ構成となっていた。

グループ内でまとめる意見というものは、1つのストーリーに登場する5人の人物について、その人物たちが行った行動に基づいて、自分が許せると思えるランキングを1～5位までつける、というものであった。ストーリーの中の登場人物は、それぞれに大切にしている価値観が各人によって異なり、許せると思えるランキングをつけることによって、自分が大切にしている価値観を認識できるようになっていたと推測される。



私が所属していたグループは、日本人男性4名、日本人女性1名、外国人男性1名で構成されたグループであった。このグループのなかで、意見を一つにまとめるということは困難を極めた。他のグループも似たようなグループ構成であり、どのグループも議論が盛り上がっていた。

当初予定した議論の時間を5分延長するほどの盛り上がりであった。結果として、私のグループでは、全員が納得できる答えに辿りつくことはできず、全員の意見の中間をとる、妥協したような結果にしかまとめることができなかった。議論が終わった後、グループ同士で、どのようなランキングになったかを発表した。4つのグループがあったのだが、そのランキングが全く同じグループが2つあった。しかし、その2つのグループでも、同じランキングになった理由が異なっていた。

近藤先生の授業では、このようなグループワークを導入に用い、理論的な枠組みを後から教えるという形を取っているとおっしゃっていた。外国から来ている学生は、議論好きの学生が多く、このようなテーマを与えると1時間でも2時間でも討議を行うらしい。発表されたランキングがそれぞれに異なる理由は各人が愛や友情、あるいは、取引というものをどのように考えているのか、その考え方の差によってランキングが変わる。異なる考え方にいたる要因は、育ってきた環境に大きく影響を受けるらしく、性差や国籍の違いは当然で、日本人学生同士でも、私立学校の出身か公立学校の出身かでも差が生まれると、近藤先生はおっしゃっていた。さらには、同じクラス内でも、グループを変えると全く違う議論の道筋を辿るというお話もされていた。

このグループワークを行った後に、質疑応答の時間を設けられた。APUの英語教育はどのようなカリキュラムで行っているのか、この授業の評価をどのようにつけるのか、このような授業で使われる題材は何を参考しているのか、参加者から積極的に質問が寄せられていた。

APUの英語教育は、熱心に勉強するAPUの学生たちが作る環境によって、さらに上を目指す向学心に溢れる学生が多く生まれるようになっていることや、評価についてはペーパーテストの割合は最大で5割までと決められていることを教えていただき、今後の中学校や高校でも参考すべき内容をお話ししていただいた。

今回の授業体験を受けて、学校の毎日の授業の中でも生かすことができる部分は多かった。この経験を少しでも、生徒たちに還元していこうと思う。

(記録 立命館慶祥中高 小西 泰輔)

### ③ キャンパスツアー

附属校卒業生の青木 萌映さん（立命館宇治中高出身）と林 哲也さん（立命館中高出身）のお2人にガイドいただきながら、キャンパスツアーに出掛けた。



キャンパスから別府湾、高崎山を望む



学生同士、話し合いができる図書館エリア



学生が学生の学習を支援するコーナー



英語による学術的な論文を書く際に必要とされるアカデミック・ライティング力を身に付けることを目的で設置。ライティングサポートは学生がチューターとして活躍している。



キャンパスを移動



APハウス前で青木さんから説明を聞く

#### ④附属校出身座談会

最初に、附属校出身の APU の学生が全体にパワーポイントで学生生活についてプレゼンテーションを行った (A)。次に、参加者が 3 つのグループに分かれ、附属生を交えての質疑応答を行った(B)。

##### A <プレゼンテーション発表>

①「APU での生活」2017 年度立命館宇治高校 IM コース卒業  
2 回生 新開 亜美さん

◆高校生時代～高校 1 年 1 月～高 2 の 12 月ニュージーランドへ 11 カ月留学。ボランティア活動・茶道を経験。すべてのことを自分でやらなくてはならない留学で刺激を受けた。

◆なぜ APU か～国際的な環境に身を置きたかった。英語での授業で、留学で培った英語力をキープしたかった。挑戦することが好き。

◆APU での学生生活：RA (resident Assistant) として寮生のサポートを行っている。モチベーションが高い子ばかりで刺激をもらえる。

・楽しいこと→Cultural week：1 週間かけて他国の文化を学ぶ。中国とインドネシアではダンスをやった。バイトをカフェテリアでしている。APU ならではの経験ができる。国際生と話しているとき楽しい。

・大変なこと→授業でグループワークが多いため、ミーティングのための打ち合わせ、予定合わせが大変。

②「shape my world」2017 年度立命館高校卒業  
2 回生 林 哲也さん

◆高校生時代～硬式野球部をできなくなって、何もすることがなく留学へ。英語・留学にもともと興味がなかった。

◆なぜ APU か～圧倒的なグローバル、自立、ユニークさ。立命館大学は特徴がない。APU はずば抜けた特徴がある。普通の大学生にはなりたくなかった。

◆APU での学生生活～power of sports に参加 (スポーツイベントのボランティア・普段の学びを活かせる)・今はいろいろな経験値を積み、マネジメント能力や人脈を広げている。

・楽しいこと→AP ハウス (寮) での生活、Cultural week (関西のイベントに参加)

・大変なこと→グループワーク

③2016 年度立命館宇治高校 IM コース卒業  
3 回生 青木 萌映さん

◆高校生時代～2 年間スペイン語の授業をとっていた。1 カ月スペインに行っていた。高校 1～2 年生までカナダに留学していた。高 3 も担任がネイティブ。高校ではテニス部に所属。ラオスの支援プロジェクトに参加し、小学校でごみの問題の授業をして、この活動を大学でも続けたいと思った。

◆なぜ APU か～最初は東京の大学に行く予定だったが受からなかった。担任の先生からコミュニケーション能力をつけるべきだと言われた。

◆APU での学生生活～1 回生の時からビジネスに触れたことで、学習意欲が増した。9 月からデンマークのビジネススクールに留学する。毎日周りに誰かいる生活が楽しい。

## B <座談会>

上記以外に立命館慶祥高校卒業の芳賀 雪菜さん、小川 達也さん、安田 伊吹さんが参加。

### ◆APU での生活

#### ～学校生活で使う言語「日本語 8～9 割： 英語 1～2 割」～

・座談会に参加した附属生は 1 回生が多く、本格的に英語を使った授業が始まるのは 2 回生以降ということもあった。

#### ～AP ハウス（寮）での生活～

- ・附属生はシェアタイプの AP ハウスに入れるので、国際学生と仲良くなれる。
- ・second というプログラムで留学生と仲良くなれる。
- ・においなど文化が違うが故の問題はある。
- ・シェアメイトが 4 か国語話せる。一緒に料理を作るなど仲良く生活している。



#### ～附属生のメリットは？～

・附属生が毎年入学しているため、コミュニティが最初からあることが良い。履修登録などわからないことを慶祥の先輩から聞ける。先輩だからこそその情報を聞けている。

#### ～APU で学んでいること～

- ・一番のいいところは、多文化であり、様々な勉強方法を知ることができる。自然と感化される。
- ・後輩たちに伝えるなら、APU で勝負をしてほしい。APU で学んで目標が見つからない訳がない。京都の方が就職先は良いと聞くが、それだけなら大学にいる意味がない。単位は APU のほうが取りにくい。成長するかは自分次第。今難しいと感じることも努力次第で変えられる。意識を変えて頑張れる場所。
- ・中 3 のニュージーランド研修をきっかけに自分で学んだ言語でコミュニケーションをとれることに感動。
- ・大学に入って、企業と関わる機会も増えてうれしい。
- ・英語が楽しい。高校時代は嫌いだったが、目標ができたから楽しい。

#### ～卒業後にやりたいこと～

- ・飢餓で苦しんでいる人を 1 万人少なくすることを目標に APU に入学した。いろんな人の考えをたくさん聞きたい。周りにも目標を持って進学してきている学生が多い。
- ・日本のおもてなしの精神を海外に伝える。日本人だからできることを伝えていきたい。海外のホテルマンをしたい。
- ・高 2 でアフリカのボツワナへ。飢餓で死んでいく子供の数を 1 万人減らしたい。そのために英語が必要。

#### ～その他～

- ・日本の歴史や地理をもっと中高で勉強すればよかった。自分を表現できる個性を持っておいたほうが良い。埋もれちゃう。
- ・来年アフリカのザンビアに行く。現地に直接行って、バイアスなしに現地の声を知りたい。
- ・高校 2 年生から APU と決めていた。モチベーションが低く、日本人としかコミュニケーションをとらない人たちがいるが、少数。もったいない。自分の気持ち次第。
- ・英語や多言語を学びたい人が来るべき。2 割は環境を活かせていない。

(記録 立命館慶祥中高 児玉 紗也香、米田 真夢)

## ⑤キャンパス内の国際学生へのインタビュー

参加者がA～D班に分かれそれぞれテーマを持って、国際生にインタビューを行った。

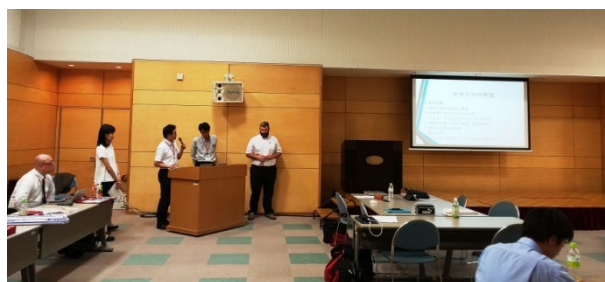


## ⑥研究発表(国際学生のインタビュー結果の発表)

15:00分頃より各班(A～D班)に分かれ、研究発表のテーマの検討を行った。テーマが決定した班からキャンパス内の国際学生へのインタビューを行った。16:30分より研究発表を行えるように各班スライドの準備やインタビュー内容の検討を行った。

### 【各班の発表概要】

A班は元々持っていた日本人の印象と現在の日本人の印象は変わったのかというテーマでインタビューを行い、発表をした。各自が一人の国際生にインタビューを行なった。メキシコ、ネパール、リビア、マレーシア、バングラデシュの学生にインタビューを行った。日本人の元々持っていた印象はまじめ、実行力が低い、シャイなどが挙げられた。印象が変わったのかという質問に対しては滞在期間やAPUでの学生生活の長さで、印象の変化に差がある。滞在期間が長いと日本人やAPUの印象は良くなっている傾向にあった。



B班はまず、研究テーマを検討した。附属校終身学生の座談会では、APUを選んだ目的は英語を話せる、学べるが理由であった。しかし、日本語と英語のどちらをよく使用するかという質問に対して、ほとんど英語を話していなかった。そこで国際生に母国語、英語、日本語の使用割合をテーマとして発表した。国際生は英語が7割、母国語が2割、日本語が1割であった。日本人と国際生の間で違いが見られた。

C班のテーマは国際生から見るAPUの魅力とAPUの改善点や提案したいことであった。魅力としての意見は国際的な環境や多文化を学ぶことが多かった。さらに、奨学金制度があったため他の大学と悩んだ時にその制度に魅力を感じ、入学している国際生が多かった。提案したいことは90カ国の集まりであるため、授業の難易度を合わせる 것이難しいので数学など簡単だと思国もあれば、難しい国もあり、難易度別に分けてほしいというものであった。

D班のテーマは高校生の時にAPUに入る準備をしたか、卒業後の進路・目的はあるかであった。国内生17人、国際生13人にインタビューを行った。国内生は留学や英語の勉強で準備をしている学生が多かった。国際生は日本語や英語に力を入れていた。国内生と国際生ともに大学に入ってから将来のことについて考える生徒はほとんどいなかった。多文化性、ダイナミズムに触れ、自分の将来を考える生徒が多かった。

(記録 立命館守山中高 峯松 健太郎)

(編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄)